



TITLE:

心理学と小説のあいだ: カール・フィリップ・モーリッツ『アントン・ライザー』とその周辺

AUTHOR(S):

松村, 朋彦

---

CITATION:

松村, 朋彦. 心理学と小説のあいだ: カール・フィリップ・モーリッツ『アントン・ライザー』とその周辺. 研究報告 1986, 2: 1-13

ISSUE DATE:

1986-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/134373>

RIGHT:

# 心理学と小説のあいだ

— カール・フィリップ・モーリッツ

『アントン・ライザー』とその周辺—

松 村 朋 彦

## I

「モーリッツのところへやってくれ。」ぼくは今朝、雇いの下男にそう言った。——「それは誰です、モーリッツ？」——「それは誰かって？ フィリップ・モーリッツ、作家、哲学者、教育者、心理学者。」——「待って下さい、待って下さい。一度にそんなにたくさん言われては。」<sup>1)</sup>

さるロシア人旅行者が書きしるしたという手紙のこの一節ほどに、カール・フィリップ・モーリッツ（1756 - 93）なる人物が誰だったかを言いあてることのむずかしさを端的に物語っているものはあるまい。ベルリンのギムナジウム教師、「経験心理学のための雑誌」（1783 - 93）の編集者、小説『アントン・ライザー』（1785 - 90）の作者、イギリスとイタリアを放浪して見聞記をものした旅行家、『ドイツ韻律学試論』（1786）を著した韻律学者、『神話論』（1791）の神話学者、そして果てはベルリン芸術大学教授にして学士院会員。貧しい軍楽隊のオーボエ奏者の家庭に生まれ、ギュイヨン夫人の流れをくむ神秘主義の一派、静寂主義を狂信する厳格な父親のもとで幼年期をおくり、ハノーファーでのギムナジウム時代にはシェイクスピアと『ヴェルター』の洗礼を受け、ベルリンに出ではモーゼス・メンデルスゾーンらの啓蒙主義者たちとまじわり、ローマでゲーテと友情を結んで古典主義美学の先がけをなし、講壇からはティークやヴァッケンローダーに多大の影響を与え、ジャン・パウルの才能の発見者ともなったこの人物は、同時代のあらゆる文学的潮流と深くかわりながら、そのどこへも分類されることを拒んでいるように、いやそもそもそうした分類をこととする文学史記述をあざわらうかにさえみえる。その弟子ジャン・パウルは、モーリッツを「受動的天才」、「境界の天才」<sup>2)</sup>（Grenz-Genie）に分類してみせる。なるほ

どモーリッツは、かれがかかわりあったいずれの分野、いずれの流派にあっても真の独創性を発揮することはなかったかもしれない。むしろ巧みに時流に流されるすべを心得た器用な売文業者のひとりだったのかもしれない。けれども、まさしくそうした「境界」を浮遊することによってかれは、その時代の総体を記録する地震計ともなりえたとは言えないだろうか。分類学の時代でありながら分類の網の目をすり抜けてしまう時代、理性と啓蒙の世紀と呼ばれながらその実矛盾と混沌にみちていた18世紀という時代の。

## Ⅱ

『アントン・ライザー』第一部（1785）の序文をモーリッツはこう書きおこす。

この心理小説（*dieser psychologische Roman*）は、また伝記とも呼ぶことができよう。なぜなら観察が大部分は実際の人生からとられたものだからである。人間に関する事柄のなりゆきに通じ、最初はささいで無意味に見えたことが、人生の進展のうちにしばしば極めて重要なものとなりうることを知る人は、ここで語られる幾多の事情が一見取るに足りないものであることを悪くとりはすまい。またもっぱら人間の内的な歴史（*die innere Geschichte des Menschen*）を描くべき書物に、登場人物の多種多様さを期待することもあるまい。というのもそれは、想像力を拡散させるのではなく集中させ、魂のまなざしを自分自身へ向けてとぎすますべきものだからである。（36）

この小説が「心理小説」と銘打たれたドイツで最初の作品であったのは偶然ではないだろう。心理学という学問が、ハーバーマスによれば、政治的経済学とならんで「18世紀に成立する市民特有の学」<sup>3)</sup>であり、他方「市民的英雄叙事詩」としての近代小説がまさしくこの時代の産物であることを考え合わせるなら、「心理学」と「小説」とは共通の基盤のうえに成立し、互いに密接に関連し合っていたと言えることができるだろう。じっさいブランケンブルクは、ドイツで最初の体系的小説理論と言うべき『小説試論』（1774）のなかで、『アントン・ライザー』の序文を先取りする形で、小説を「ひとりの人間の内的な歴史」<sup>4)</sup>（*die innere Geschichte eines Menschen*）と規定している。この意味で、ドイツでは、近

代小説は最初から心理小説となるべく定められていたのかもしれない。

けれども、モーリッツが『アントン・ライザー』の執筆と並行して、ドイツで最初の心理学雑誌「経験心理学のための雑誌」(Magazin zur Erfahrungs-seelenkunde)(以下「雑誌」と略記)の創刊、編集にたずさわっていたことを考えるなら、この「心理小説」における「心理学」と「小説」の結びつきを単なる同時代の一般的傾向として片付けてしまうことはできないだろう。じっさい、「雑誌」には『アントン・ライザー』からの引用が再三にわたって掲載されているという事実からしてもすでに、モーリッツにとって心理学の研究と小説の執筆とが分かちがたく結ばれていたことが見てとれるのである。それでは、モーリッツの言う「経験心理学」とはどのようなものだったのだろうか。

経験心理学が、一方ではビエティスムスの自己省察を世俗化した形で受け継ぎながら、他方で、思弁的、抽象的、演繹的な旧来の心理学にとってかわるべき経験的、具体的、帰納的な新しい科学として、啓蒙主義の一翼を担っていたことは、すでに多くの研究者によって指摘されている。<sup>5)</sup> モーリッツは、「雑誌」創刊の前年に発表された論文「経験心理学雑誌のための提言」(以下「提言」と略記)で、これまで人間の身体の病いに関する研究にくらべて精神の病いに関する研究がほとんどなされてこなかったことを嘆いて言う。「いかなる身体の病いにもまして、精神の病いの方がどれほど多様かつ有害で周囲に蔓延することか。いかなる身体のための薬理学にもまして、精神病理学の方が人類にとってどれほど必要不可欠であることか。」<sup>6)</sup> そのような学の基礎となるべき人間に関する様々な経験や観察の収集の場として構想されたのが「雑誌」なのである。そこには「実際の事実のみが印刷され、寄稿者は省察を織り込もうという誘惑に抵抗」<sup>7)</sup> しなければならない。なぜなら「欠けた部分は空疎な思弁によってふさぐのではなく、事実によって埋め」<sup>8)</sup> ねばならないからである。こうして性急な体系化、道徳的規範化におちいることなく、あくまでも具体的な個々の事実の積み重ねをめざす点に、経験と観察の学としての経験心理学の本領はあると言えるだろう。

そしてそのような人間観察は、まず自分自身から始めねばならない、とモーリッツは説く。「まず幼年期の最初期以来の自分自身の心の歴史をできる限り忠実に描き出し、幼年期の最初期の記憶に注目し、かつてとりわけ強い印象を及ぼしたものは何一つささいなものと考えてはならない。」<sup>9)</sup> この個所を先に引用した『アントン・ライザー』の序文と比較するなら、自己の内面へと向けられたまなざし、一見ささいに見える個々の事実の重視、とりわけ幼児記憶への注目といっ

た点で、自伝小説の方法と経験心理学の方法との間の一致は見まがうべくもない。さらにモーリッツが「提言」のなかで、冷静な自己観察者であるためには、「自分を自分自身の観察の対象として、あたかも自分が他人であるかのように見る」<sup>10)</sup> ことができなければならないと言うとき、それは『アントン・ライザー』がモーリッツ自身の前半生を忠実に記録した自伝小説でありながら一人称形式をとらず、主人公アントンの視点と常にそれを相対化する語り手の視点という二重のパースペクティヴをもっていることと無関係ではない。小説における主人公と語り手の関係は、経験心理学における患者と医師の関係に対応し、すなわち心理小説『アントン・ライザー』は、経験心理学者モーリッツが自らの病いを自らの手で診断しようとする病跡学の試みにはかならないのである。

けれどもモーリッツにとって「心理学」と「小説」の関係はそれほど一義的なものではない。「提言」のなかで小説というジャンルに対して与えられる評価は極めて両義的なものだからである。一方でかれは、「すぐれた小説や戯曲」が「人間の内的な歴史のための寄与」となることを認めながら、それに続けて、「だがただ一つの現実の世界からの観察の方がしばしば、書物から得た千の観察にもまさる実際の価値をもつ」<sup>11)</sup>と付け加えるのである。そればかりか、経験の学としての心理学は、事実にもとづかないあらゆる書物、とりわけ小説とは正面から対立せざるをえない。それゆえ、「雑誌」第一巻の冒頭でモーリッツは、「私が提供するのは事実であって、道徳的なおしゃべりでも、小説でも、喜劇でもない」<sup>12)</sup>と宣言するのである。こうして互いに分かちがたく結ばれながらも、その内部に亀裂をはらんでいるかにみえる「心理学」と「小説」の関係は、「心理小説」『アントン・ライザー』にも影をおとさずにはおかまいだろう。

### Ⅲ

「雑誌」第一巻にのせられた「幼年期の最初期の記憶」と題する論文のなかでモーリッツは、「われわれの現在の状態を過去の状態に結びつけている細く目立たないきずな」<sup>13)</sup>としての幼児記憶の重要性を強調し、自らの幼年期の記憶を物語っている。そしてそのうちの幾つかは『アントン・ライザー』へととり入れられてゆく。一見ささいに見える記憶の断片を自由連想にも似たやり方でつなぎ合わせることによって自己の内的な歴史を再構成すること、それが心理小説の方法なのである。貧しい家庭環境、父親の狂信する厳格な宗教、両親の不和、そして

自らの病気によって暗くぬり込められたアントンの幼年期は、小説のなかにくり返し現れてくる二つの言葉、「抑圧」(Unterdrückung)と「排除」(Verdrängung)によって規定されているように見える。けれどもそのなかから時おり、幸福感と結びついた記憶が浮び上がってくる。そのさい極めて特徴的なのは、そうした記憶がある特定の場所に結びついている点である。

故郷H...を去り、B...の町の帽子職人L...のもとで徒弟奉公していた少年時代のアントンは、牧師P...の説教に語られる「理性の高み」(101)という言葉に特別の感銘を受ける。なぜならこの言葉は、かれのうちに二つの場所にまつわる記憶を呼びさますからである。その一つはオルガンの据えつけられた教会の聖歌隊席のイメージであり、それは「かれにとっていつも及びがたいものに思われ、かれはよくあこがれの念にみちてその上を見やり、オルガンの不思議な構造やその他そこにあるものを間近に眺める以上の幸福はないと願うのだった。」けれどもこのイメージは、かれがまだH...にいたころのもう一つの記憶と結びついている。それはH...の町にそびえる塔のイメージであり、その上で楽師たちがラッパを吹きならし、時計の文字盤と鐘とがとりつけられたこの塔は、幼いアントンにとって「極めて魅力的な対象」となる。「足にわずらっていた苦痛や、かれを嘆息させた両親の圧制にも拘らず、かれの慰めであり、幼年時代の最も心地よい夢であり、しばしばすべてのことを忘れさせてくれる切なる願望であったのは、H...の新市街の塔の文字盤と回廊とそこにつり下げられた鐘を間近に眺めることにはかならなかった。」(102)そしてこの願望をかなえることなくH...の町を立ち去らねばならなかったアントンが見る夢のなかにこの塔のイメージはしばしば現れてくる。こうして塔の上へと向けられたアントンのまなざしは、社会の底辺に生まれた人間の高みと中心へのあこがれの原体験をなしているように見える。<sup>14)</sup>そしてそれゆえにこそ、この塔のイメージは、アントンのおかれた境遇が変化してゆくにつれてその意味合いを次第に変貌させながら、小説のなかにくり返し立ち現れてくるのである。

自殺未遂事件をおこしてB...での徒弟時代に終止符を打ち、父親に連れられて故郷H...へと戻って来たアントンは、「長年の別離ののちに再会する友人のように新市街の塔を眺め、かれの鐘に対する愛情が急に再び目覚めた。」(107)やがてアントンは、思いがけず奨学金を得てH...のギムナジウムへの入学を許されることになる。けれどもギムナジウムでの生活は、かれに新たな抑圧をもたらさずにはおかない。教師から受ける不当な叱責、富裕な同級生たちの軽蔑や嘲笑、

かれに食事のほどこしを与える隣人たちから受ける屈辱が一つ一つ数え上げられ、それがアントンの異常に傷つきやすい心に及ぼす影響が分析されてゆく。こうしてアントンにとってギムナジウムが、そしてそれとともにH...の町が、かれを圧迫するものと化してゆくにつれて、町にそびえる塔もまた違った意味をもってかれの前に現れてくる。

休暇の間H...を発って両親の移り住んだ田舎の町へ向かうアントンにとって、「H...の四つの塔が視界から消えるや、そこで過ごした人生の全期間がかれの眼の前に現れ、かれの眼に映る視界とともにかれの魂の視界も広がった。」(165)けれどもH...の町へと戻って来るアントンにとって、四つの塔の眺めは心をしめつけるものとなる。「とりわけ高く角ばり、上には小さな尖端しかもない市場の塔は、今再び見ると、かれには恐ろしい光景となった。そのすぐかたわらには学校があり、同級生たちの愚弄や嘲笑、舌打ちが、この塔とともに突然かれの心に再びよみがえった。」(188)かつて高みと中心の象徴としてアントンがあこがれた塔は、かれを抑圧し、排除する権力の象徴へと変貌する。こうして社会の底辺に生まれた人間が上昇をめざせばめざすほど、ますます周縁へと排除されてゆくメカニズムを明るみに出す経験心理学の手法は、単なる自己の内面の病いの診断という意味での個人心理学のレベルにとどまるものではない。

ある貴族のもとで家庭教師をつとめるアントンが受けた屈辱の原因を分析して語り手は次のように言う。「結局のところ、ここでかれをとらえ、かれに生を嫌悪させたのは、市民的境遇によって抑圧された人間性の感情だった。(… ) どうしてかれがまさしく働く者の役割を、他の者が支払う者の役割を引き受けたのだろう。世間での境遇がかれを幸福で満ち足りたものにしていたなら、かれは至るところに目的と秩序を見出したことだろう。だが今、かれにはすべてが矛盾、無秩序、混沌に思われた。」(300) こうして支払う者と働く者、排除する者と排除される者の関係をあばき出す語り手の眼は、個人の内面にではなく、市民社会それ自体のうちにはらまれた病巣に向けられている。その意味で、心理学を政治的な力をもたないドイツ市民階級の内面性への逃避としてとらえる見方は一面的と言わねばならないだろう。<sup>15)</sup>けれども他方、経験心理学者モーリッツの眼があくまでも時代の病いの分析にとどまり、決して社会変革へと向けられたものではないこともまたここで確認しておく必要があるだろう。言いかえるなら、経験心理学には病状を診断することはできても、治療への道を示すことはできない、いやむしろ、診断が核心をついたものであればあるほど、それは逆に治療の不可

能性を証しだてる結果とならざるをえないようにすら思われる。メランコリー患者が自らの病いを治そうとして自己の内面に眼を向ければ向けるほど、ますます深いメランコリーにおちいってゆかざるをえない<sup>16)</sup>という堂々めぐりが、『アントン・ライザー』の発展を欠いた悪循環の構造を規定しているのである。

こうした悪循環は、小説のなかではまず分析的言語のもつ限界として現れてくる。アントンにとって言語とは「人間の思考をより高い存在の思考から分け隔てているつき破りがたい壁」と感じられる。「言語がかれの思考を妨げるように見えた。けれども言語なしにはかれは考えることができなかった。よくかれは、言葉なしで考えることができないものかと何時間も苦勞して試みた。——すると存在の概念がすべての人間の思考の限界としてかれにつきあたってくるのだった。」

（216）自己とは何か、個とは何かについて思いめぐらすうちにアントンは、「自分が自分自身から消えうせてしまったかのような、そしてまず一連の過去の記憶のうちに自己を再び見出さねばならないような」（227）思いにとらわれる。けれどもこうして一連の過去の記憶を積み重ねることによって自己を再構成しようとする経験心理学の方法は、その限界を露呈せずにはおかぬ。なぜならアントンにとって真の個とは「永遠に変わることのない、すべてを一望のもとに包括する存在」でなければならない、そのような超越的な存在と引きくらべると、「かれ自身の存在は、単なる虚妄、抽象的な観念」でしかなく、「目的もなく、引き裂かれ（abgerissen）、こま切れにされた（zerstückt）」ものに思われてくる。

「引き裂かれた」、「こま切れにされた」という言葉がこの小説のなかにくり返し現れてくるのは、分析的な心理学の方法と無関係ではないだろう。個々の事実を重視し、体系化を回避する経験心理学の方法は、生を一つの全体へと統合するのは逆に、無数の断片へと解体してゆかざるをえない。そこにはすべてを一望のもとに包括し、連関と統一を与えることのできる超越的な視点が欠落している、いやむしろそのような超越性を拒否する点にこそ、経験心理学の新しい学としての存在理由はあったのだから。

#### Ⅳ

モーリッツの経験心理学のもつこうした一面は、かれの同時代人たちにもすでに明瞭に意識されていたように見える。シラーは1788年12月12日付けのロッテ・フォン・レンゲフェルトとカロリーネ・フォン・ボイルヴィッツあての手紙でモ



ーリッツの「雑誌」に触れて次のように述べている。「私の見たところ、それはいつも悲しげな、しばしば不快な感情をもってわきへ取りのけられてしまいますが、それというのもそれが一群の人間の悲慘にばかりわれわれの眼をくぎづけにするせいなのです。私は、どの号にも哲学的な論文を添え、明るい視野が開け、この不協和音がいわば再び調和へと解消するようにかれに忠告してやりました。」シラーのこの発言は、「調和」を要請するヴァイマル古典主義と、あくまでも「人間の悲慘」に固執するモーリッツの立場の隔たりを浮きぼりにしている点で興味深い。けれども、経験心理学者モーリッツが他方ではまた、「非心理学的な芸術論」<sup>17)</sup> (シュリンプ) すなわち芸術作品の自己完結性というまさしくドイツ古典主義美学の確立者でもあったことを考えるなら、事情はそれほど単純ではないことがわかるだろう。事実、モーリッツは『アントン・ライザー』第二部(1786)の序文で、すでにシラーの忠告を先取りする形で次のように述べてもいるのである。

かれ〔アントン〕の過去の人生に注目する人は、最初はしばしば無目的性、引き裂かれた糸、混乱、夜と闇しか見えないように思うだろう。けれどもその人の眼がそこにくぎづけになればなるほど、闇は消え、無目的性は次第に失せ、引き裂かれた糸は再びつながり、混沌や混乱は秩序づけられ、不協和は知らぬ間に調和と協和へと解消するのである。(120)

ここで語っているのは経験心理学者モーリッツであるよりはむしろ、作品に関連と統一を与えることによって一つの全体へとまとめ上げようとする小説作者としてのモーリッツであるように見える。小説『アントン・ライザー』の執筆はモーリッツにとって、単なる経験心理学のための一症例の提供にとどまらず、芸術創造による自己治療の試みでもあったとすることができるだろう。なぜならモーリッツによれば、分析的な日常言語、「悟性の言語」には拒まれていた、すべてを一望のもとに包括する超越的な視点は、自己完結的な芸術作品のもつ「より高次の言語」、「想像力の言語」、「感情の言語」によってのみ実現されるからである。<sup>18)</sup>

1786年に発表された「時間と永遠」と題する論文で、モーリッツはそのような超越的な視点を次のような比喩で語っている。

私がある町を見物したいとき、下の地上にいるのなら、通りを一つまた一つと歩き回り、次第に記憶の助けを借りて町全体の観念が生じてくるまで待たねばならない。

けれども私が町全体の展望の得られる塔の上に立っているなら、以前は順々に（*nacheinander*）見るしかなかったものを、一度に同時に（*nebeneinander*）見ることができる。<sup>19)</sup>

記憶を順々に積み重ねることによって全体像を再構成しようとする地上からの視点が経験心理学者のものであるとするなら、全体を同時に見渡すことのできる塔の上からの視点はより高次の存在のものであると言える。こうして『アントン・ライザー』にくり返し現れてきたあの塔のイメージが、今新たな意味合いを帯びて再び立ち帰ってくる。すなわち、幼いアントンがあこがれた塔は、自らの生の全体像を展望することのできる視点をも意味しており、塔に登ることを許されず、脈略を失って断片化した地上からの眺めに甘んじざるをえないアントンの眼に、塔は逆に生の連関の不在の象徴と映らざるをえない、と。

それでは主人公の生に統一と連関を与えようとする小説作者の試みは、最終的に破綻したのだろうか。小説のなかでアントンは、自らの人生の全体を垣間見ることのできる瞬間を幾度か体験する。そしてそのような特権的瞬間は、またしてもある特定の場所と結びついているのである。B...で徒弟時代をすすすアントンは、一年半前に初めてこの町にやって来た時通った市門の前を偶然再び通りかかったさい、奇妙な感情に襲われる。「あの時以来のかれの人生全体が、今急にかれの記憶のうちに立ち現れた。（…）かれがこの一年半の間にB...で体験した人生の様々な光景のすべてが入り混じって押し寄せ、かれの心が急に得たより大きな尺度からすれば、個々の形象は微々たるものに見えた。」（97）こうした特権的な記憶の成立する条件を分析して語り手は次のように言う。「これまでの人生の全体をありありと眼のあたりにするためには、かれの注意を常に一時的なもの、日常的なもの、こまぎれのものに結びつけている糸をすべて断ち切る必要があった。」（99）その意味で、アントンがほかならぬ市門の前でこうした特権的な瞬間を体験するのは偶然ではない。なぜなら市門とは、日常的世界と非日常的世界、町の内部と外部との境界に位置し、そこから町全体を一望のもとに眺めることのできる場所だからである。<sup>20)</sup>

アントンの体験する特権的瞬間のもつこうした境界的性格は、もう一つの場所

と結びついた形でさらに明瞭に現れてくる。H...でのギムナジウム時代、アントンは町の周囲にめぐらされた市壁をしばしば訪れる。「というのも、そこではせせこましく家の建てこんだ町と田舎の広大な自然とが境を接しているがらひどく異なっており、この対照がかれの想像力に生き生きした影響を及ぼしたからである。」(264) かれを圧迫する町から逃れてきたアントンはしかし、広大な自然へと沈潜するのではなく、かれのまなざしは逆にかれがあとにしてきた町へとふり向けられる。こうして市壁の上に立って家々にともる灯りを眺めやるアントンは、二つの相反する感情にとらわれる。一方でかれは、「自分の運命が互いに交錯し合う人々の運命のこの無限の混沌たる堆積のなかにいわば失われ、それによってちっぽけで無意味なものにされているかのような奇妙な屈辱感」を味わいながら、他方、「そこから全体の展望を得、(…)かれ自身のちっぽけでせま苦しい領域を超越したように思い、自分自身に特別なぬきんでた運命を予言」(220)するのである。こうした感情の両義性が、町の内部と外部を分かち市壁という場所の境界性と結びついていることは明らかだろう。そしてそれはまた、共同体への帰属感と共同体からの疎外感との間に引き裂かれたアントン自身の境界性の反映でもある。塔からのまなざしと市壁からのまなざし——同じく「全体の展望」を与えてくれるものでありながら、この二つは決定的に違っている。一方が共同体の内部へと統合されたインサイダーのものであるとするなら、他方は共同体から排除され、排除を代償としてしか自らのアイデンティティーを見出すことのできないアウトサイダーのものである。

こうして抑圧と排除に始まったアントン・ライザーの物語は、生を無数の断片へと微分＝差異化してゆかざるをえない経験心理学の方法と、生を一つの全体性へと積分＝統合してゆこうとする小説の要請との間に引き裂かれることによって、再びもとの出発点へと立ち戻る。この小説が主人公の挫折をもって中断されているのは、単に素材上の理由だけによるのではない。なぜなら、社会の底辺に生まれながら最後には大学教授にまで出世をとげるモーリッツ自身の生涯は、教養小説の格好の素材ともなりえたはずだからである。『アントン・ライザー』は、モーリッツの前半世を忠実にたどりながらも、そうした教養小説となることをかたくなに拒否しているように見える。H. J. シュリンプが言うように、この小説が「反教養小説」<sup>21)</sup> (Antibildungsroman) であるとするなら、それは単にそこに主人公の内的発展が欠落しているという理由だけによるのではない。「教養」という制度を不可能にするメカニズムを分析しおおせた点で、すなわち個人の内

面へと向けられた心理学のまなざしが生の断片化をもたらし、生の全体性をめざす小説の要請が社会からの疎外を証しだててしまうという逆説を自ら体现してみた点で、心理小説『アントン・ライザー』は、後に成立するジャンルとしての「教養小説」に対する批判的な視点をすでに内在させているのである。

## V

1786年11月、モーリッツはローマで『ヴェルター』の詩人に初めて出会う。ローマ滞在中に腕を骨折したモーリッツをゲーテが手厚く看病したことは、『イタリア紀行』に詳しく語られている。1786年12月14日付けのシュタイン夫人あての手紙にゲーテはこう書きしるす。

腕を折ってまだベッドに寝ているモーリッツは、ぼくがそばにいと、自分の人生のくさぐさのことを物語ってくれ、ぼくはそれが自分のことに似ているので驚いた。かれはぼくの弟のようだ。同じ性格だが、ただぼくが運命に寵愛され引き立てられたところで、運命に見放され傷つけられたのだ。

またゲーテはシュタイン夫人に、当時第三部までが出版されていた『アントン・ライザー』を読むようにと勧め、「この書物は多くの意味でぼくにとって価値あるものだ」（12月23日）と書き送っている。イタリア旅行の間にはさんで行われる『ヴィルヘルム・マイスター』の改作にあたって、モーリッツとの出会いがゲーテにとって少なからぬ意味をもっていたことは様々な形で指摘されている。<sup>22)</sup> ここでこの点に立ち入るだけの余裕はないものの、『ヴィルヘルム・マイスター』が、反教養小説としての『アントン・ライザー』のあとを受けて、それに対するアンチテーゼとして書かれた、いわば反・反教養小説でもあったという事実は、教養小説の成立を考えるうえで見すごしてはならないように思われる。<sup>23)</sup>

『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』第七巻の冒頭近く、ロターリオの城をめざすヴィルヘルムのゆくてに「幾つかの塔と破風をもった古い不規則な城」（第1章）が姿を現わす。後になってこの城の「古い塔」（第9章）に導き入れられたヴィルヘルムは、そこで修業時代の終りを告げられ、その名もまさしく「塔の結社」の一員として迎え入れられる。そこにかれ自身の修業時代を書きしるした巻物を見出したヴィルヘルムは、今や自分自身の生涯を一望のもとに見渡

すことのできる視点を得るのである。

ちょうど「運命に寵愛され引き立てられた」ゲーテと「運命に見放され傷つけられた」モーリッツとが鏡に映った像の関係にあったように、塔の上から自らの人生を展望するヴィルヘルム・マイスターのまなざしと、最初はおこがれの念をもって、次には恐怖の念をもって地上から塔の上へと向けられるアントン・ライザーのまなざしとは正確に対称形をなしている。塔の上からのまなざしが、「お前の見たものは、どのようなであれ、かくもすばらしかった」とうたう塔守リュンコイスのものであったとするなら、地上からのそれは、視界を限定された、けれども悲惨な現実から眼をそむけることを許さない——ゲーテがモーリッツを呼んだ愛称を借りるなら——<sup>フスライザー</sup> 徒歩旅行者のまなざしだったのだから。

## 註

『アントン・ライザー』からの引用は、下記の著作集のページ数で示す。

Karl Philipp Moritz: Werke, hrsg. von Horst Günther, Bd. 1, Autobiographische und poetische Schriften, Frankfurt a. M. 1981.

- 1) Nikolay M. Karamsin: Briefe eines reisenden Russen, Berlin, 6. Juli 1789.  
In: Insel Almanach auf das Jahr 1981, Karl Philipp Moritz, Wer ist das?  
hrsg. von Horst Günther, Frankfurt a. M. 1980.
- 2) Jean Paul: Vorschule der Ästhetik, I. Programm, § 10.
- 3) Jürgen Habermas: Strukturwandel der Öffentlichkeit, Neuwied u. Berlin 1962, S. 44.
- 4) Friedrich von Blanckenburg: Versuch über den Roman, Faksimiledruck der Originalausgabe von 1774, Stuttgart 1965, S. 326.
- 5) Hans-Jürgen Schings: Melancholie und Aufklärung, Stuttgart 1977, S. 28ff.;  
Hans Joachim Schrimpf: Das „Magazin zur Erfahrungsseelenkunde“ und sein Herausgeber. In: Zs. f. dt. Philologie 99, 1980, S. 161–187.
- 6) Deutsches Museum, Bd. 1. 1782, S. 486.
- 7) Ebenda, S. 490.
- 8) Ebenda, S. 491.
- 9) Ebenda, S. 492.

- 10) Ebenda, S. 495.
- 11) Ebenda, S. 489.
- 12) I. Bd. I. Stück, S. 2.
- 13) Ebenda, S. 66.
- 14) Vgl. Robert Minder: Glaube, Skepsis und Rationalismus, Frankfurt a. M. 1974, S. 42f.
- 15) Vgl. Hans-Jürgen Schings, a. a. O., S. 29.
- 16) Ebenda, S. 37.
- 17) Hans Joachim Schrimpf: Anton Reiser. In: Der deutsche Roman, hrsg. von Benno von Wiese, Düsseldorf 1963, Bd. 1, S. 126.
- 18) Vgl. Hans Joachim Schrimpf: Die Sprache der Phantasie. In: Festschrift für Richard Alewyn, Köln, Graz 1967, S. 165-192.
- 19) K. Ph. Moritz: Werke, hrsg. von Horst Günther, Bd. 3, Erfahrung, Sprache, Denken, Frankfurt a. M. 1981, S. 242.
- 20) Vgl. Mark Boulby: The gates of Brunswick: Some aspects of symbol. structure and theme in Karl Philipp Moritz's 'Anton Reiser'. In: Modern Language Review 68, 1973, S. 111.
- 21) Hans Joachim Schrimpf: Anton Reiser, S. 120.
- 22) Hans Berendt: Goethes „Wilhelm Meister“, Ein Beitrag zur Entstehungsgeschichte, Dortmund 1911, S. 135ff. ; Rudolf Lehmann: Anton Reiser und die Entstehung des Wilhelm Meister. In: Goethe-Jb. 3, 1916, S. 116-134  
Hans-Jürgen Schings: Wilhelm Meisters Geselle Laertes. In: Euphorion 77 1983, S. 419-437.
- 23) Vgl. Hans-Jürgen Schings: >Agathon<, >Anton Reiser<, >Wilhelm Meister<. Zur Pathogenese des modernen Subjekts im Bildungsroman. In: Goethe im Kontext, hrsg. von W. Wittkowski, Tübingen 1984, S. 42-68.